

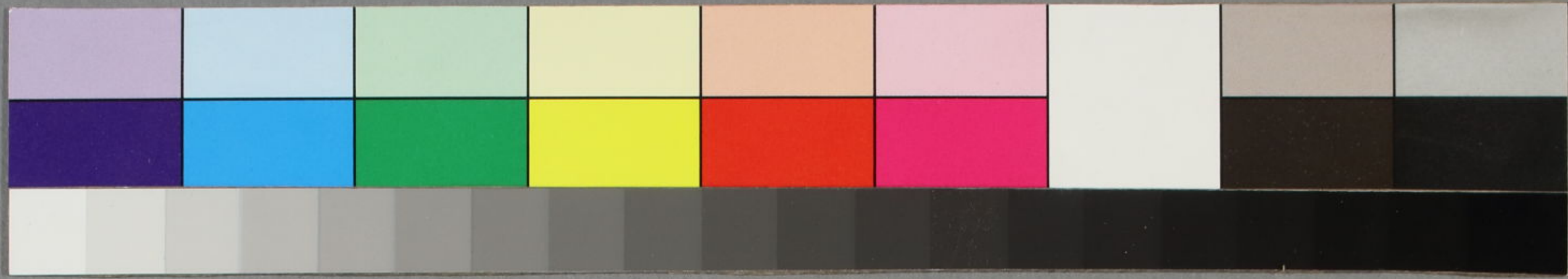


耳底抄

集

14
2478
206





門 14
2488
卷 206

一出入有規有矩

右の先箇銘

死字と野中

冷泉為村

河も心河ふしあまふ河もつら
りなとくしとや堂仰る文字ハ阿

歳會残暑 今

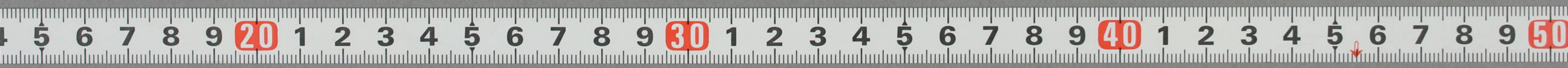
年の暮り暮る年乃神

くま様より人の汗は汗は

富士山の脈をけしあまの首の

塙換杖

世の本乃尺く魚をさし年あけの
みりしけハ海あけ



夢大無事

墨

七世女はれまゝのほりぬきありに
りやをまゝにまゝにまゝに

赤い儒者志 全

去りし後の約を待たぬ
かしのそばにまゝにまゝに

高孔子志 全

賢を賢とし色をかきし
去りのまゝにまゝにまゝに

高深者娘 全

父がしるはれぬを
うすまゝにまゝにまゝに

七

去りし後夫婦
まゝにまゝにまゝに

後村の風景 全

出づる月の水に化れぬ
涙はの海にまゝに

奇魚新年酒 全

おまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに

奇人出の娼妓を色歌

まゝに

思ふがまゝに
青のまゝにまゝに

昔はあつた事とて此の世に
まゝ道子知ぬる者なき
ふまゝ立つの者もせりた
この道ふも迷ひなき

奇琴志 全

枯きぬふささく移さし
引まぐくゆいぞおろく
あしすり琴の音

奇歌中志 全

まゝをそぐ
あつたの
思ふ

奇神祇庇

まゝうはぐみま
見や社
の里

奇あま風系 蜀山人

下見れば及をぬるのま
うみても通れぬまの橋

奇時行志

見るとま下ゆき
まゝのあつたのま
奇痛志

うしろのそ尾尻
あつたのま
奇痛

奇粹志

清い心とくちくちのひまの
かきくしとくちくちのひま

蟹の画の後より 蜀山人

みる人にくちくちの目のは 枝あり

河の蟹のほろのほろの

梅後の二枝とわす 廿七

香ふ白ふあま返谷とくちくちの

けあはしとの枝のて枝

色も香もくちくちのほろのほろの

りくちくちのほろのほろの

名もくちくちのほろのほろの

色もくちくちのほろのほろの

ぬはくちくちのほろのほろの

然月氣ふ白く毒のほろ

橋をき

保寿

くちくちのほろのほろの

谷のほろのほろの

謝人照梅溪の梅枝

然舟南國驛郵使折梅

梅溪一斜のほろのほろの

從化迹は照仲のほろの

事更まをき

枯く遠くお船布二はくちくちの

あつしはまのり報つて

安らふ年九し何ふしあつし
久の言神の力を世世に
いふる事とあつたは
えん自

蓮の島布と鴨一様
あつたふとあつと念
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

医師も田月一
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと
あつたふとあつたふと

中村、秋、雨、方、誰、招、
幸、迹、下、界、島、徳、鬼、
裁、呼、茲、志、酌、元、猫、
任、抄、一、登、莫、顔、色、
陸、押、合、四、修、橋、

家康都人記

人氣、
御、越、土、地、の、無、自、海、音、
海、繪、

大、子、喧、氣、季、候、石、取、り

よ、め、の、少、し、た、り、を、い、と、
多、月、

伊、勢、兩、宮、下、修、り、
西、方、上、人、

何、と、の、か、り、し、ま、た、ら、ぬ、
か、ら、う、い、ま、し、た、地、洞、土、石、

各、方、長、者、九、法、書、

堪、忍、高、朝、起、
三、支、分、別、日、
正、直、支、受、敬、
三、兩、始、末、日、

右、六、味、慈、然、の、り、
九、し、本、綿、と、衣、と、
朝、卯、時、用、魚、

但、高、人、三、七、
七、七、七、七、七、七、

算盤の粉之の蔵人
始末を信し上根を
武士の忠義我知を
嫁弄す人辛保を
かへる系

可一後計
堅固之儒者ヲ戯傷連行不
後日然ことして居故傍人
如行ヤト云一かハ儒者多ク我
能ク養フ然之氣ヲト云傍人
衆不知其意之ハ行幸ヤト云
ハ儒者ノ云ク曰ク難謂ト云ク

山月 傳

おのゝかいははふ排りて
是引る山を傍りて
有教

かぢく子殿と
浦蓮

多しをばあめのはかり
早しをばあめのはかり
あうんむむと
密のねとくおつかや
とくりたりと
祐為

歳旦
空際のうちを世と八鳥籠の
りしとほりて

月あき

早月の新やちりくも此
よりゆく社やあはるる せむれ

大なる女漢

くまのちる也 身けの思ふ
乃の思ふ事なしたるの思

一唐本映六

上論條例十帖三百卷

律令法例 三書より 唐本
律令法例 唐本 三書より 唐本
今年 三書より 唐本 三書より 唐本
唐本 三書より 唐本 三書より 唐本

文政二年於國書院信

律令信

大律とて司たたす 唐本

吾輩下りたるを 唐本

とて付て其のたす 唐本

大律とて司たたす 唐本

目古船信

何のたすのたすのたすのたす
あはれ此のたすのたすのたす
まのたすのたすのたすのたす
私のたすのたすのたすのたす
何れもいふこと 唐本
目行のたすのたす

もろ志しの侍者いふ金乃
宵さししみよのむらけ
うらむとむらけさるのあ
けののそ何いをも

まのあや

あや時之のその中より

あや

裏は山待度

伊代子

あやのあやあやのそも

春んや
あやあや

あやあやあやのそ乃

一磨うた

あやあやあやあや

一杯のあやあや

中あや大杯又小杯

依杯去杯杯あや

杯あやあやあやあや

あやあやあやあや

又

杯あやあやあやあや

あやあやあやあや

時、御也、越後、但、新、の、百、年
 破、つ、ふ、経、の、を、事、何、事、し、
 念、の、御、新、の、二、百、五、日、御、の、如
 録、寺、御、其、法、人、御、時、
 禱、の、面、目、癩、子、
 あり、曰、人、死、

常盤寺前の画漕り

かまの、（系村）
 志、（長中）
 志、（長中）

交友

（系村）
（長中）

ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
 ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

山、其、山、の、奥、に、御、位、の、記、
 とも、木、を、今、の、是、此、を、言、は、
 ち、
 一、体、を、あ、る、

山、石、と、八、四、あ、り、あ、る、の、傍、の、
 御、位、の、人、を、と、み、や、ま、あ、り、
 ち、
 大、體、國、師、

唯坐

修平 為中

まをさす教教乃四才
相まをすきりきり
秋のゆの結

通天の結

いふと海ももろ
あまをす結乃と
松の結

元日信栴本影前言志

正二位實蔭

あり起て婦た結
若子たう乃結
名をり或か
正年と春この

おゆ地ふ番の結
懐ののつ結

結

あつりは
あ乃月
あをうり

あをうり

草茅先言

寛政元巳酉之冬

中山居士中井積善祥撰

右全五冊

有喜世諺草

十返舎九戲編

全部二冊亥子春老強弱

表帛藝女三銃持國合本一冊

頓死咒

南天葉五枚 小豆三粒

生草毒一片

古白布二何三中七忌七拵

骨、入乳二骨二骨二持二死二

續後撰集春中俊成御詩

名二記二山二女二也二也二

子二也二也二也二也二

千載集春上源仲正歌

春二也二也二也二也二

志二也二也二也二也二

右每卷二也二也二也二也二

文政三也二也二也二也二

九洲大破當安靜

價高二也二也二也二也二

詠祝言和歌

四位實際

志願のよりの産をいそいでくれ
ひびく人なき侍代のため
春日同様に東照宮を祝ふ和歌

大近所権將君不實際

君きけいおまもみだのまのついで
この年の竹やまのついで
草叢茶 掬く露

花よりすめる山吹まのついで
おひいとしはすこしはけり

近侍代申上

さういそいなる様の事を極
いそいそいそいそいそい

戒専老師のまのついで
名く年終りまのついで

のまのついで花とまのついで
一寸のついでと作のついで

思ひぬいそいそいそい
詠をまのついで目覚めを極

貴くおまのついでまのついで
まのついで

おまのついでまのついで

詠をまのついで

おまのついで

市川周子亭宗師のまのついで
のまのついで

川崎をみる

長子名

白猿ハ見ざるやをる人今も

親をみるこころをみる

也

国平言

白猿

つぐもなるに氣を

長子名

さるふしを

おの子の行は女の肩を

と人のさけはと女を

さるふしと

さるふしと

俊あちりり

歳旦

雅章

めをこころを

民ゆをうれ

あやう

さるふし

さるふし

緋威を

つぎとちを

あか者緋威の

送下れり

山科家

耳系

寺三綱

藤蔭摘葉 正親町家御抄

調度 雜草抄之申借用
可奉事

和歌のぬきあはれ 全冊
おのゝ御抄少本

托鉢之ふく
因飢女女之腹

石も所由
河多又之記
あつ歌之雲山僧

文政十三年 仙洞寺會始名録

御製

梅柳毛香玉の守り危りせき
うきよのふれあはれ記うりし

洞井之きりけり
あともめりもわさし
庭園一位入道 祐真

みきんりぬきのま
ちともれし名所
為別

系後之るま
うきまのしほ
雅也

系後之るま
これまのしほ
可奉事

これらなるおまの山は指し
しつらうゆいふを色を
心結

祝詞考 三冊

歴朝詔詞解 六冊

古本居宣長撰

○神道名目抄 可求事

學服譜 惟禱帖縁障子縁草部

右都る可寫る

戒書

おらうしを海くさるりあ
志の志が 小免を記し

信を

さうされり部を
さうされり部を
さうされり部を
さうされり部を

算盤の終身 李鷹

加所不礼者人乃

率月遊多

津か家乃新良

由起

竹ヲ翫時ノヤシナリニ
事撥ト云葉ヲ水牛ノ
入生時ハ青木ノ
カシクト云

旅枕之傳

或テの枕ノ外ノ立派ニ
移ル如款を所ニ路ノ
カシクト云
カノ鮮の中ノ光光付之光
の文字を指先ニ書

摩利支天尊

ヲニリニイソカ 右三遍

寢多時ハ其間ノ生有もの
入来時ハ乍子目覺云々
む聖朝有る云々摩利支
天尊真言ホ右三遍
起而後喝クカすべし

已惶

及名嵩田忠臣ヲ達音紀長谷雄ヲ
茂昭葛野ヲ賀能匡房ヲ萬歳
明衡ヲ安闌通憲ヲ民輪上
下ノカナヲ取テ呼也

已上字類抄波部

儀式大嘗會条云

阿波國糸布一端木綿六斤羊羹十缶

蒜英根各漬十五年乾羊蹄

蹲鴟各十五籠已上忌部所作鰻卅九編鰻

籍十五坪細螺棘甲羸石華等

並廿坪已上那賀潛女十人所作

宣詞訓

勅勤久日夜等狀隨在

御意愛感赤丹乃德

食惠良政其官任賜宮人

次之退罷已惶御物賜止

豊樂聞食日在

踏歌見御酒食府

原氏名教の卷揚名のすけ代事

すめいらふ冬身名のらうとふ

心ちりし法國のすめらふ成えれ

とも使務行すたすすけと

いままんをらうりふさしたる以

ともいらふのすけといらふ

揚名の関白ならしもいらふ

名はらうけ実白らしれる等

今の世れ周白と云ふ揚名といふ
原もいふや

紀世とく 際

多樹

井原守もこの遠山乃形うら路冬
何うの浦もあやうまう

まやまの襷

全

まやまのさやうのさやうのさやう
まやまの月影もいふ我れ

ねむり

全

はつねと本もいふなはなはな
心のなはな思ふをさういふ

月夜独和用

系後

月影とたう船れとあしは
そりく 杉子さうをいふ

周后

志つけもいふかき船すまの船
市へいふ人れ何いふと

黄中

城のつかひもいふ柳乃とさや
吹やとくこれめさう

故前西相舟追慕

褚為

秋懐舊

毛乃音もいふ此の月もいふ
おもいけ志乃とくいふ秋

三千あるまじし三年ありふし

杖をいづくも 志のいづる

東風の吾れ乃ちも 志のいづる

たしむるも 秋乃ちも

長明西雲前 陣菊常霜

いづきのをたきしぬそのころ名の

白のいもあつめあれ

うはとあつめあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

色陣菊 案うれのたの色に秋の色

御して向の菊はあつめあつめ

庭の面乃色のをれあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

いづきの乃ちあつめあつめあつめ

あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花

宇守の親

信の江方松のときやは
さうくつり

うがーがーこま
まのまら道

まみの江の松をさあ
子代うら
いささうつりおまのまら道

藤貞幹先生誦竹留

冬二十首

あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花

幽風七月海云九月新
蕪籬振羽七月在野
八月在年春

在戸有蟋蟀入我牀下

あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花

野居冬日每有世景

あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花
あつたあまのときや乃きくも花

カキのまやも林、梅も多し
うららかなる、園のまはり
畑の色にはほいとそく三方あり
とたうき、まふ菊糸のたれり
歸去来辞三徑就荒朽菊猶存
おかれのまよとほまこよひけり
あらしはゆるる、月あまのけり
ゆき後ふお、風のまよとれり
かりかきまむ、野あまのれり
水まよ、まのり我まよ、まのり
かまよ、まのりのまよ、まのり
社まよ、まのりのまよ、まのり
まのりのまよ、まのりのまよ、まのり

催馬栗田中井戸 多たりのあ

ともあまのれり、たたらま、川の
あまのり、~~栗~~林云田中

の井戸、田中つくりん多あぬ
といひ、と池、ゆり、水、ゆり
とあま、まのり、その水、ゆり、田中
ゆり、まのり、井、まのり、まのり
多たりのまのり、田中、まのり、まのり
まのり

つりか、こまのり、あまのり、まのり

都、あまのり、まのり、あまのり、まのり

あまのり、まのり、まのり、まのり
あまのり、まのり、まのり、まのり
あまのり、まのり、まのり、まのり
あまのり、まのり、まのり、まのり

初よりし月夜に露一たりのけや、
あざきの香たにまのけけの
井はくぬ何とよつもの志のきた
かききしけたる野海方の人
浪山もも炭とよきとよき
よきとよきとよきし
雪みちも春のきりよけりか
くまかきしけふさきとよき
調行 一 蓋 寒 燈 所 并 友
教 益 温 耐 聖 中 春
春は春もももらハ多きとよき
少車の

こぼれくえんろう 梅を海に流す

卯子のもの年多ふとらハ
けりく海かふる 卯く年秋
たしし 梅し

文政三年後三月十九日子刻頃伊勢度
會郡自祠官餘突火餘燔燬盛及
八十志社及擲官其必多信以下志并
地本上まゝ土家凡及七八百重焼
亡翌年自中刻頃稍鎮火云
雖然於赤本信有無筆傳疾誠
以難有神慮恐懼石女畏拜愛
右之傳聞山田所云列駕与予行向高

因に難言院の社を小俣の所
山陰にありて小舎を三つありて
小中長氏の社あり是社名帳
のすは石の社なり以文弘訓
社をて侍てかろみは信を篤の
後を侍るをありて
改より親おえに侍やうれは
むりしを今お見えなり

今年まきし年の頃より御座
年りと稱して阿波西中の
人志頼りて伊勢信ををり
りりは又十々歳の頃か
まのちりしふさ七郎より
末のまきしは社名の記
ありて社名山の道行の御代
とてしむるがこりし

三の下の所しすまう日の御の
侍を信ありては
細き侍代のまきしは
かきしは侍代のまきしは
抜りあり
勅りけりは行ぬ侍を
抜りあり

〇見え頼の證
夫本集
仕卷は侍と見え頼の

さきも折うけそ 福を冬にうけ
子也

花有歡毛

花鳥 雅志所

なまなりけ末のまゝに 歌春の
ふ代と中ははすす 春の氣をうけ

冠下給 小元始 播所

和院上もま行七
科又安成 相宗 富之
中長志行少月を所

父三

甲之代 ぬいふつ 草之木も

酒とくを 春日れり ぬき

大外比師定撰

伊勢寺に 宿ありを 傳きと 繁

伊勢の海 深き ぬき 春の 花ゆや

さきも 折うけ ちり 打は ぬき ぬけ

ねり

此を 夜を おもひ ぬき も 春の 花
清く け 春ありを いそ ぬき

貝原篤信 先生 辞世

趣き ぬき ぬき 夜に ぬき ぬき

いそ ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

車坂

上賀茂川に流す六町斗上
久保ヶ畑ノ古道三十七年
已前迄ハアリ
三人ノ坂道ヲ替ヒヨシ古
夫ノ物證也

山科氏政 三十一歳の時

秋も昔は家もあつたに
いそぐわや年のちとほり

山科 三十一歳の時

大石内藏助良雄

乃ひたつた無のうまを
月もあつたのころは

文政十三年後三月下旬依幕府命
京師諸寺ノ僧徒淫逸之輩悉
ニ捕依罪輕重或於三冬猶遇往
來之衆目其身之恥辱乍曝矣
就中雖為輕罪^於寺之住僧者
為遠竄是亦依罪之輕重有
遠近之差異乎嗚呼復古之
法制嚴密々々法度可然可
若身頃日山田以文先生以和
歌尔言里出干た

中ノ僧尼を
尼寺ノ入を
傷者ノ少

法制院の成り立ち
その制子より不制の令の世
ふるまひ美祿麻の婦女と流産不
任せし法釋放縱其し流産
幕府の法制院を設けし
お坊の出家皆禁獄せしれ
しし令く 重なる神の
めらるる佛の教もやしく
法師の奉行ひも有らざる
と成りしよきも有りし
つらつ法をり非のめらるる法の師の
道七ききしりし物もけりし
いさるるはられ人なあるれ
くも世ふはちをのこは法の師

おのの寺のもちふつ録す
きしけりたひふくたをなまうけ
崎山流する法師不帰とて
をりしる佛不ぬをゆきの時
何ののつらめと者とを

あ

以上流布のねん
たるる物まの鞠のまの似せし
時をのりたる今の様
た是の物まの細をうし
物をうするむくむ

髪結

髪結

髪結之時 髪結之時

髪結之時 髪結之時

髪結之時

總角之時

交秋

紅梅薄襦

垂髮之時

入元結

紅梅薄襦

待衣

口檀紙

口檀紙

白檀紙

白薄襦

或引合

右身常之能

從童

主人束帶衣冠之時

待衣

主人待衣之時

主人水干之時

右谷風新其平亂襟風諫

氷始結

為打拵

氷始結之時

氷始結之時

氷始結之時

氷始結之時

氷始結之時

けのいしん
しすいん

元祖上人慈念の蓮をよゆる空の
名有りけり裏書曰わ乃乃海世有り
也くおの一人のそふさよの法経
ハ西方十方億と候る観經ハ
寺也不遠とくまたよ只そ人の
んふさよ一とく又くう性生不
能ハ一人の候不信ふより魚
能く官佛はるる

蓮生まふる 海の上

。外寸法

一 壺外寸法
口廣 四寸九分
底深 二寸七分

一 五合寸法
口廣 三寸九分六厘
底深 二寸六厘七毛

一 壺合寸法
口廣 二寸五分
底深 一寸四分五厘

右何レモ内法寸法也

壺古周少外寸法也 子印
井戸多系統 土類以海
換 子印 あり多統
一人可系四折外水に葉
之四に加候也とく 甚々
書り終り

法 井るつらみかけ
壺 井戸多統

甲 印 多統 あり多統
者 外 見 少 老 序 内 多 統 也

うそを身代の政をこころい
るをいふ所をたすし

草堂の庵

まをこころいししはるる清の
縁糸のまをこころいし

大佛妙門主

十無量院宮

夫人の信を思ふて思ふて
かこつた物をもつたもつた

甘戸庵

老古のうしよまをこころい
ぬししをこころいし

或人の信を思ふて思ふて

弟を信ふて思ふて思ふて
信をこころいし

甘戸庵

信を思ふて思ふて思ふて
信をこころいし

半裁刀法

補得裁刀半月鞘

観書一日則有一日之益

五十年に月日の事

在るに思ふ人々を思ふて思ふて

信を思ふて思ふて思ふて

信を思ふて思ふて思ふて

信を思ふて思ふて思ふて

信を思ふて思ふて思ふて

橋上野傍に二錢洗来者取

昨日録傳存草造

たうたうしおひて神つて
しらぬくゆきいぬやうな
ま

三島千三十七月二日 宗師 古地を

地震

宗師

申した動くまき、天う代の

時のよのたうまにまをた

に

古地を補

多うはまの心まをまけし

こまのまふらまはたは

名にのたう 地をまをま

葛原のわうたう 志の婦し

いもと路のたう 何とま

たうくはまをたうのま

たうたう地震のまをま

地震まをま ちんたう

うらまのたうのたう

たうまをま ちんたう

まのたうまをま ちんたう

まのたうまをま ちんたう

地震

たうまをま ちんたう

まのたうまをま ちんたう

地震

まのたうまをま ちんたう

今宵のちかき春をて記の秋の
清きもいづこし思ふ

安女はちのちをうせふ
泣く侍侍り 正なる秋野

伊人のよ奈非のちや字の秋の
よきを清き

そのむめちや 秋の昔の
清き川の流れ

あまの志
あまの志

夕のあふる屋 秋野の
清き月の夜

あまの志の秋の昔の
清き川の流れ

七日のすまのちや 秋の昔の
清き川の流れ

あまの志の秋の昔の
清き川の流れ

あまの志の秋の昔の
清き川の流れ

あまの志の秋の昔の
清き川の流れ

道なきのみならず
三千餘り三川の如く
乃其をさしけり

とあるの如し

道なきは三河の如く

とありては三河の如く

とありては三河の如く

三河の如く三河の如く

とありては三河の如く

とありては三河の如く

とありては三河の如く

とありては三河の如く

地を記す

とあり

大變を大平とて其

を記す

國を記す

海を記す

神を記す

的を記す

乃其をさしけり

の如く

大の如く

感味を記す

止けを記す

甲を記す

Handwritten text in cursive script, top right section of the right page.

Handwritten text in cursive script, middle and bottom right sections of the right page.

Handwritten text in cursive script, top left section of the left page.

Handwritten text in cursive script, middle and bottom left sections of the left page.

中絶 一 山のふもとにありては
野 一 ものゝたふらふとて

野 一 冬月 一 けい 一 冬月 一 けい 一 冬月 一 けい

冬月 一 けい 一 冬月 一 けい 一 冬月 一 けい

後 一 後 一 後 一 後 一 後 一 後

橋 一 橋 一 橋 一 橋 一 橋 一 橋

祇園會 一 祇園會 一 祇園會 一 祇園會 一 祇園會

か 一 か 一 か 一 か 一 か 一 か

白 一 白 一 白 一 白 一 白 一 白

野 一 野 一 野 一 野 一 野 一 野

浦 一 浦 一 浦 一 浦 一 浦 一 浦

御 一 御 一 御 一 御 一 御 一 御

浦 一 浦 一 浦 一 浦 一 浦 一 浦

海馳 とてすう地一志死やはしる

花書 只今此方より何と書るれば

曉書 初らるる竹のまゝにやうき

池上 いふてあるて池水に

田家 小山田にまみりては

路果 草花の水を事なれ書古のころ

五月

とよきと秋も

いいてまこふて

いふて

月入る方

夫天地間ハ神一ノ神の

清き水なるは水ノ直氣紹信ハ

久遠ノを并豊ノ四方の

國ハ隅の隅も 静みし流り

多し〜時律凡 ありし言

民もあやあや〜しん山

〜のめ 静けの思に控

〜の事をもあ〜く目も

二七三

清和の
白鳳長衛



以下全紙
白紙

